



小説

あさひな
朝比奈 敦
あつし

山口市

(1946～2015)



提供・矢野道代

【著作】

『天目山』(平成12・梓書院)

『方先生』(平成15・編集工房ノア)

『^は国境』(平成19・島影社)

ほか

朝比奈敦(本名矢野栄一郎)は下関に生まれたが、父の勤めの関係で小倉から大阪へと転校を重ねる。高校生になると、心通う友だちを求めて同人誌を発行。誌名は『仲間』。残念ながら作品は不明だが、『仲間』が朝比奈文学の原点ではあるまいか。

大学卒業後、株式会社クラレに入社。一年後、(財)法曹会出版部で五年勤めた後、教職を志し、神奈川県立津久井高等学校教諭となる。神奈川県から山口に戻り、柳井商業高校に在任中、山口高校の教諭数名で始まった同人誌『風響樹』を知り、三号から加わる。最初の作品は「Kさんの死」。既にいくつかの作品を持つ力量を伺わせるものであった。

やがて山口高校に赴任した彼は、宇部の文学グループの同人誌『鷹』に参加する等、創作意欲旺盛で、平成二年には処女創作集刊行。平成五年、山口県文化振興奨励賞受賞。

平成八年には更に発表の場を広げ、『九州文学』に参加。復刊十二号で『天目山』が好評を得、更に平成十三年、『V I K I N G』六一二号に掲載された『囚人の墓』で第九回神戸ナビール文学賞受賞。

平成十六年、山口高等学校依願退職。平成十七年、大阪文学学校の講師に招かれる。その傍ら自身の創作にも更に意欲を燃やし、『V I K I N G』六八〇号に寄稿した『国境』が『文学界』二〇〇七年下半期同人雑誌優秀作に選ばれた。

作品の舞台は、南の国境の名もない島。そこへどこからともなく住み着いたハトちゃんと呼ばれる得体の知れない男が主人公である。

作品評の要約は、「何を願うでもなければ何を恨むでもなく、毎日適当に生きているものうい生活。現代日本のものうさを見事に映し出した傑作」と高い評価を得た。

次は、作者自身の感懐。

「二十八歳から小説を書き始め、二十三年が経過してこの作品が載らなければもう載ることはないだろうという確信めいたものがあったので率直に嬉しかった。(中略)ハトちゃんという主人公に最初のうちは山頭火のような、と書き加えたい衝動にかられた。私が山頭火を知るのは高校生の時。一九六〇年後半である。人間と言うものは何と哀しい存在なのか、なんで自分から不幸の方へと踏み込んでいくのか、という疑問にとりつかれた。だが書き進めていくうちにハトちゃんという主人公は山頭火とは全く別の道を歩むことになる。しかし、臍の部分ではつながっているような気がする。」

振り返ると、朝比奈敦は総じて不条理という宿命を背負う人間に視点を置き、それに最後までこだわり続けた作家であったと云えよう。

しかし、最後は家庭小説『家族の行方』・創作集『心やさしい小説集』を置土産に還らぬ人となった。



季刊文芸誌『JURIN』
一朝比奈 敦 追悼号一

小説は、つまるところ人間を描くことにあると思うのだが、人間の本質が表出するのは、不幸な生涯の中にあることが多い。一言でいえば不条理ということになるが、そうした人間にぬくもりのある視線を注ぐことこそ小説を書く者の大切な心構えだと思っ。

―後進に当たった書簡より―



大阪文学学校にて